

平城京左京三条二坊

奈良市庁舎建設地発掘調査報告

I 序 章

1 調査の経過

この報告書は奈良市庁舎建設のために、奈良市が旧三笠中学校校庭で行った発掘調査の報告である。現在、奈良市東寺林町に所在する奈良市庁舎を奈良市北新町61番地にある三笠中学校敷地に移転することが決定したのち、この地域における埋蔵文化財、とりわけ平城京に関連する遺構の有無が問題になった。昭和47年春、埋蔵文化財に関する協議があり、同年8月1日から9月2日までの1カ月間地質調査と平行して、発掘に関する予備調査を行った。調査は岸俊男、沢村仁の指導で中村徹也が担当した。この予備調査で、平城京の条坊制にもとづく南北と東西方向の小路を発見し、くわえて古墳時代の遺構も存在することが明らかになった。

予備調査の成果にもとずき、最低限として庁舎敷地の発掘調査を行うことになり、昭和48年4月17日に「奈良市庁舎建設地発掘調査委員会」を設置した。その委員の構成はつぎのとおりである。

岸 俊男（京都大学教授）、木村博一（奈良教育大学教授）、吉村正一郎（前奈良県教育委員）、坪井清足（奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長）、沢村 仁（同遺構調査室長）、狩野 久（同史料調査室長）、池田邦三（奈良県教育次長）、慶田八郎（奈良市助役）、森井慶太郎（同教育長）、中本正則（同建設局長）、元田宇三郎（同建設局長）、角脇一男（同庁舎建設事務所長）

5月10日の第1回の委員会において、吉村正一郎を委員長に選出し、小路の交叉点に関する遺構をできるだけさける方針で、庁舎の位置や発掘面積を決定した。この発掘調査には奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部があたることになり、庁舎敷を東西にわけ夏期と冬期

1 序 章

の2次にわたって調査を行うことになった。

第1次の調査は、平城宮跡発掘調査部の第83次発掘調査にあて、昭和48年8月1日から10月9日までの2カ月にわたって行い、調査面積は約3,200㎡であった。調査では坊内の南北小路をはさんで存在する十坪と十五坪内にひろがる奈良時代から平安時代初期までの邸宅に関する遺構を検出した。

第2次の調査は第86次発掘調査とし、昭和49年2月12日から6月4日までの4カ月を要し、その調査面積は約3,000㎡であった。今次の調査では十五坪の中心部分の遺構、ならびに二坊大路の西側溝を検出した。この間5月13日の発掘調査委員会において、発掘調査で明らかになった遺構については記録保存としてとどめ、庁舎の設計に変更をくわえないことを決定した。

2 調査の概要

調査は奈良市北新町61番地にある庁舎敷約6,200㎡について行った。この地は奈良盆地の北辺に位置する沖積地であり、現在の標高は61.3m前後であるが、これは校庭盛土上面の高さであり、以前は周囲の水田と同じように標高60.9m前後とみられる。東の佐保川、西の菰川にはさまれるこの地域は、平城京条坊では左京三条二坊十・十五坪にあたり、南面を三条条間路（現在の大宮通り）、東面を二坊大路で画している。三笠中学建設以前は、明田・高樋・竹垣内・大蔵という字名をもち、条坊地割りの痕跡をよくとどめていた(fig.1)*。

調査にあたっては、この地域を6AFI—H・G地区と命名し、発掘区東方の南北に長い区域を東地区、西方の南北に長い区域を西地区、その間を中央地区と仮称した(fig.2)。調査では十・十五坪を画する南北方向の小路、十五・十六坪を画する東西方向の小路を検出した。さらに二坊大路西側溝の一部を発見した。このことによって、十五坪の東西幅が410尺であり、南北長も、約400尺前後という推測が

可能である。坪の外周には築地ないしは柵の遮蔽施設をもうけ、そのなかが宅地となることが明らかになった。十坪では発掘面積がせまく、かつ遺構の密度があらいので、宅地内の建物配置を復原することはできない。十五坪では、ちょうどその中心部を発掘したことになり、この坪を一区の宅地とする建物の配置を復原することが可能であり、ほぼ100年間に、大きく4期の改修が行われていることが判明した。

奈良時代の遺構と同時に、古墳時代の大溝を発見した。溝のなかには土器・木器などがおびただしく堆積しており、5・6世紀ごろの奈良盆地北辺の状況をうかがう重要な資料となった。宅地の廃絶後、15世紀ごろになって、十五坪の東半部に大きい河川の氾濫のあとがあり、流砂土のなかからこけら経などの中世信仰に関する遺物を発見した。

*字限図の原図は岸俊男氏から提供された。

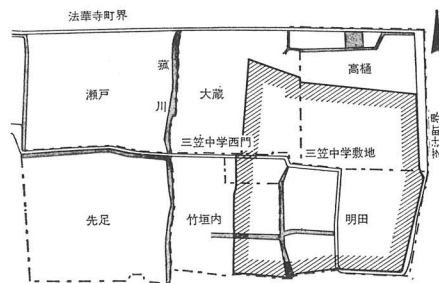


fig.1 三笠中学建設以前字限図

3 調査日誌

第83次発掘調査 1973年7月30日～10月9日

6AFI—H地区

7・30 予備調査の結果にもとずき、校庭造成時の盛土、水田の耕土、床土は、ブルドーザで排土することに決定。この作業が本日まで終了した。発掘調査の準備。

8・1 発掘区の西地区、中地区から床土の残土を排除。

8・7 床土排除終了。中央から西地区と中地区に向って遺構検出を開始。灰褐色土面で遺構検出を行ない、南北に走行する数条の溝を検出。この溝は新しい時期のものらしく、もう一層下の赤褐色土まで下げることにする。この面で石敷きの広がる部分がある。

8・8 西地区の東寄では南北にのびる旧水田地割りの境があり、この西方は一段低くなっている。排土中の灰褐色土には遺物が混在し、緑釉瓦片がある。中地区、灰褐色土を除去、南北の中央部分では瓦片の出土が多い。

8・9 西地区、発掘区の南部で土器、瓦片の出土多し。中地区、中央やや南寄りにパラスの散布あり、大型の石3個がある。礎石か。

8・10 西地区、南部で柱穴状の遺構出現。いまのところまとまらず。北部では灰褐色土に切りこんだ小溝が交叉してあらわれる。中地区、再度西端にもどって遺構を探る。西辺に接して、南北方向の溝らしきもの（のちにSD872となる）があるが輪郭不明瞭。

8・11 西地区、発掘区のほぼ中央で、南北にのびる柱穴5間分を検出（SB875）。中地区、昨日発見した南北溝の輪郭を出し、北方から発掘。奈良時代の遺物があり、小路の側溝とみられる（SD872）。

8・13 西地区、依然として東西に走行する小溝が多数あらわれる。中地区、SD872の東側で南北に延びる柵15間分を検出、坪の外周を囲む柵とかんがえられる（SA871）。

8・14 西地区、11日に発見した柱列に対応する西側の柱列を発見。中地区、北部のSA871の東側で、3間分の柱穴を検出。

8・17 西地区、発掘区の西南寄りで、南北小溝に重なって南方に延びる小穴列を検出。間隔は3尺程度で建物に関するものとおもわれるが、方位も南で西に振れており、性格不明（SA883）。

8・18 西地区、SA883は2番床土から掘込んでいることがわかり、

奈良時代の遺構でなくなる。これの東側に位置する柱列は7間×3間で西廂付の南北建物となる（SB875）。発掘区の南部で、南西から北東にのびる砂礫の範囲は溝の痕跡らしい。

8・20 西地区、SA883と同じ小穴が西側で平行している。発掘区南西隅に、桁行2間以上、梁行4間南北廂付きの東西棟建物（SB876）があり、桁行さらに西へ延びるようである。

8・22 西地区、SB876は桁行5間分を検出するが、西妻は発掘区外にのびる。先に検出したSB875は赤褐色土層の上面から掘りこんだものであり、SB876はその下層で検出したのであるから、後者の方が古い時期に属することになる。

8・23 西地区、西北隅で東西棟建物の東南隅を発見、桁行4間、梁行1間分を検出するが、それぞれ発掘区外へ延びる模様である（SB879）。SB879の南で東西方向の柵を5間分検出する（SA878）。その南に小土壌群があり、土器など出土。中地区、発掘区の中央で南北に延びる柵15間分を検出（SA870）。南は発掘区外に延び、南から7間目のところから、東1間を隔てて3間の柱穴が平行しており、柵に小屋がとりつく状況である。

8・24 西地区、SA878の南から発掘区の東北隅に向って蛇行する砂礫の部分は幅5m内外の溝であり、奈良時代以前に遡る可能性があり、現状では掘下げない（SD880）。SD88の南で井戸を発見、方形の掘形をもつ（SE877）。

8・28 西地区、SB875の東で南北方向の柱穴を3間発見。中地区、中央の北半で南北方向にならぶ柱穴が出はじめる。いまのところ建物にまとまらないが、少なくとも2時期以上の建物が重複する模様

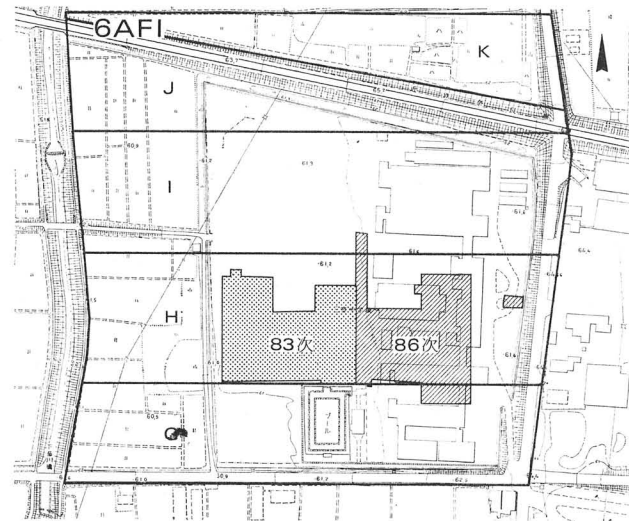


fig.2 6AFI地区割図

I 序 章

である。

8・29 中地区、中央の南半でも柱穴が出はじめる。

8・30 西地区、土壌などを検出。中地区、中央の柱穴は東にのびる東西棟建物で南北に廂がつくらしく、また2度の建替が認められる（のちにS B 882, S B 864となる）。

9・1 西地区、S D 872の西6mのところ南北方向の溝を発見、小路の西側溝とおもわれる（S D 874）。中地区、中央の建物の約10m南で、東西に延びる柱穴は柵のようである（S A 863）。

9・3 中地区、南端の柱穴は梁行2間の南北建物らしい（のち東西棟建物S B 862となる）。

9・7 西地区、S D 874の西側には坪を囲む柵の遺構はなく、本来は築地でのちに削平されたか。

9・8 中地区、現在までに発見した柱穴を整理する。中央建物は桁行5間分を検出したが、東妻はさらに発掘区外に延びている（S B 882・S B 864）。南方の建物は2棟が重複したもので、桁行3間以上の東西棟建物（S B 862）に桁行4間以上の東西棟建物（S B 862）が重複している。S B 862の北側にある柵S A 863の東端は発掘区外に延びる。ただ柱間が狭く、2時期にわかれる可能性が強い。北方には桁行5間以上で西方の南側柱に廂がつく東西棟建物（S B 869）があり、その南に3間×3間の小さな東西棟建物（S B 866）がある。

9・11 西地区、S B 879の北方を拡張する。S D 880の西半分のみを掘り下げる。中地区、S B 869の規模を探るため、西方に発掘区を拡張。

9・12 西地区、S B 879は2間×4間以上で東西棟の建物となった。S D 880の上層砂利面は奈良時代ないしは、それ以降のもので、下部に6世紀頃の大溝が存在する。ただ、下部溝の南岸については確認していない。中地区、S B 869の西妻を検出。桁行6間以上の建物となるが、北廂の有無は確めていない。

9・22 現地説明会

9・25 中地区、S A 884の東方で南北柵（S A 885）を検出。

9・26 空中写真測量の準備。

9・27 空中写真測量、地上写真撮影。

9・28 地上写真撮影。

9・29 補足調査開始。東地区、発掘区南限でS B 861, S B 862が重なる古墳時代の溝（S D 881）の一部を発掘。

10・5 西地区、井戸（S E 877）の発掘、梓板の保存良好、底に数個の完形土器がある。

10・9 発掘終了。

第86次調査 1974年2月12日～6月4日

6 A F I—H地区

2・12 バックホーでの盛土除去完了。発掘開始。中地区の西端から取

残しの床土を排除していく。

2・15 東地区の東限からも床土とりを開始。土層は、粗砂、細砂、粘土の順で堆積しており、細砂層から中世の笹塔婆などが出土する。

2・16 東地区、中央部から笹塔婆こけら経の出土が多い。その南方は細砂層の上面で掘下げを止め西方へ向う。

2・18 東地区、東寄りに粘土で築く南北方向の堤状遺構があり、その西辺に杭がならぶ。これは校庭造成以前の畦畔か。

2・21 中地区、堤状遺構の幅は約5mで、その中央に浅い南北溝が走る（S X 1055）。S X 1055以東は東地区の土層の延長である。

2・27 東地区、細砂層の除去を開始。中央からやや西寄りに南北に延る堤状の遺構がある。その規模はS X 1055よりも小さいが、類似のものとおもわれる。東地区、東南隅での笹塔婆などの出土多し。

3・5 東地区、細砂層の排土は本日ではほぼ終了。

3・8 中地区、遺構検出面を灰褐色粘土層に決め、その上部にある暗褐色土を除きはじめる。この2層の境目には遺物が比較的多く堆積する。南寄り、S D 881の東延長部とみられる遺構を検出。S D 1055の東側で試掘坑を設定。深さ50cm位で、人頭大の河原石を並べた石敷に遭遇する。（のちS B 970の柱根固め石であることがわかる。）

3・11 中地区、S X 1055の東側で掘残しの細砂層を掘り、笹塔婆などを採集。発掘区西寄り、S B 882の東妻らしい柱穴を検出。

3・12 中地区、西端の南限でS B 862に伴う柱穴を検出する。

3・13 中地区、S B 882とS B 864に伴う柱穴続出。S A 863の東延長部分の柱穴も出はじめるが、83次とは少し様子が異なる。

3・14 中地区、S B 882は東西桁行7間で終る。S B 864はさらに東に延び9間になる可能性大。この2棟に重複して第3の東西棟建物出現。現状では、桁行2間以上で梁行1間分の柱穴を検出するが、西妻柱は1間分東にある（S B 962）。

3・15 中地区、S B 864は桁行9間で終る。S B 882北廂に重複して、5間以上×2間の東西棟建物を検出（S B 963）。西から3間目と4間目とに仕切柱がある。S B 864の北に接する柵（S A 865）はさらに東にのびる。中地区西北隅の拡張を開始。北面の小路を探るため。

3・18 東地区における細砂層の発掘過程において、この区域が中世の氾濫に遭い、奈良時代の遺構はすでに流失したものとかんがえていた。しかし、中地区の東寄り、地山に切りこんだ柱穴を検出し、奈良時代の遺構が東に延びる可能性が出てきた。

3・19 中地区、S X 1055以西の遺構検出は大体終る。S X 1055の東側中央で試掘坑を設定し、土層の状況を調べることにする。

3・20 中地区、中央の試掘坑で東西棟建物の西妻と南側柱にあたる柱穴を発見（のちにS B 970となる）。この試掘坑の北方にもさらに一本の試掘坑を入れることにする。その結果、東地区の全面に奈良時代の遺構が存在することが明らかになった。

3・26 中地区、北西拡張区の遺構検出はほぼ終了。S B 868の北方に東

西に走る大小2条の溝を発見。南側の小溝に接する付近に土壌がかたま。発掘区西南隅のS B 862とS B 861の桁行はともに5間となる。

3・29 現在までに検出した遺構について空中写真測量を行うことにしその準備にかかる。

4・2 空中写真測量。北西拡張区の地上写真撮影。本日にてA₁班の作業終了。以後はA₂班が発掘作業を継続することになる。

4・3 発掘調査再開。中地区、東辺中央に位置する根固め石のある建物(S B 970)は、南北に廂がつく。発掘区北辺付近に小柱穴群があるが、いまのところまとまらず。

4・4 中地区、南辺付近では砂利層の下に暗灰色粘土層が薄くひろがり、その下でS D 881が東北方に延びる模様。S D 881を切りこんで東西方向の柵(S A 863)と土塼(のちにS E 967の掘方となる)がある。

4・5 中地区、S B 970の桁行の西から3間目を検出。この位置で南北に延びる柵(S A 969)12間分を検出、これが発掘区の南北を縦断しているようである。S B 970の北側で梁行2間・桁行2間以上の東西棟建物(S B 971)を検出。

4・6 中地区、S B 971の桁行は3間で終る。ただし、南から延びてくるS A 969の柱穴とは重複する。中地区の遺構検出は一応終了し、東地区に移動。東地区では全域にバツクホーをいれ、残土の青灰色砂層を除去することに決める。

4・12 東地区、S B 970の東妻柱を検出、桁行5間、梁行4間の南北廂付建物となる。その北方の小柱穴群についてはまだまとまらない。

4・17 東地区、中央以東では青灰色砂層の下にある灰黒砂層を除去したのちに遺構検出に掛かることにする。

4・20 東地区、東辺から遺構検出開始。中央以北では柱穴が多いが、南方ではきわめて少ない。

4・22 東地区、北東隅で井戸の掘形(S E 991)出現。その南方の柱穴群は数を増すが、まだまとまらない。中央部においても、方形の井戸(S E 979)があり、四隅に石をおく。その南側では小柱穴が多い。

4・23 東地区、北方の柱穴群のうち、東西棟南北廂付建物(S B 987)がまとまる。梁行4間、桁行4間を検出するが、東妻は発掘区外に延びる。S B 987に重なって南北棟らしい建物が南に延るが、いまのところ不明瞭(のちにS B 986になる)。発掘区南限に沿って、梁行2間、桁行2間以上の東西棟建物を検出(S B 974)西妻はさらに西に延びる。

4・24 東地区、中央部のS E 979の西方で、井戸を発見、側板と四隅の柱をとどめる(S E 978)。南部のS B 974は4間分延びるが、西妻は西方にのびる様子。この4間目に柱には間仕切りの小柱があり、直接つながらない。北方に向う柵(S A 976)を7間分検出。

4・25 東地区、西北隅に2・3棟の小建物が予想されるが、いまのところまとまらず。中央部で桁行6間以上、梁行4間の東西棟建物の西妻と南廂の柱穴を検出(S B 980)。南北方向の柵(S A 976)の北から3

間目の柱穴に東西方向の柵(S A 973)が交叉し、東へ4間西へ2間分を検出。S B 974の桁行6間目の柱穴を検出。

4・26 東地区、北西隅の建物はまだまとまらないが、その南で3間×2間の東西棟小建物がまとまり(S B 982)、西に3間分の南北方向の柵(S A 981)がある。南部のS B 974の西妻柱を検出、桁行は6間。

4・27 発掘区全域の精査を開始。S A 973はS A 976の西へ5間延びる。S B 970の南西隅にかかる土塼は井戸になり(S E 967)、その東にもう1基の井戸がある(S E 968)。

5・1 東地区、中央部の東西棟建物(S B 980)の全貌が判明。すなわち、当初は四面廂付の建物であるが、後に南北2面の廂を建替え、東西2面の廂を除去している。なお、西南隅の廂柱穴にS B 970の身舎北側柱が重複しており、S B 970の方が新しいことになる。

5・4 東地区、S A 981の西への延長部を探るため西方に発掘区を拡張。中地区、S B 861の東妻を求めて発掘区を拡張、東妻の柱穴が出現し桁行が5間となる。

5・7 空中写真測量の準備。

5・8 地上遺構写真撮影。

5・9 空中写真測量。

5・10 地上遺構写真撮影。

5・11 部分実測の準備。

5・13 補足調査開始。

5・18 現地説明会。

5・23 東二坊大路側溝探索のため、校庭の東端に試掘坑を設定。

5・25 S D 881の部分的な発掘を開始し、大きく3層にわかれることを確認(fig. 3)。

5・27 S D 881の全域を発掘することに決定、着手。東二坊大路側溝出現、青灰色砂と褐色粘土の地山に掘りこんだ溝の西肩があらわれ、溝には青緑色粘質土が堆積。

6・4 S D 881を完掘、東二坊大路側溝とともに写真撮影。埋戻し開始。本日で発掘のすべてを終了。

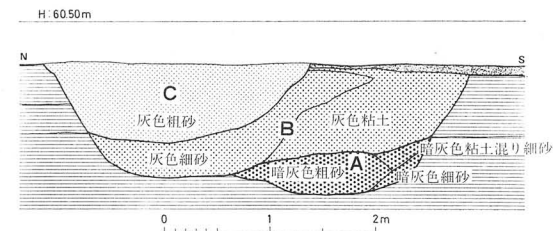


fig. 3 S D 881堆積土層図

4 写真測量

標定点No.	X	Y	H
B.M.I	-146,168.607	-17,689.621	61.007
1	-146,223.320	-17,685.238	60.049
4	-146,194.689	-17,685.238	60.208
7	-146,168.881	-17,685.238	60.078
22	-146,187.793	-17,650.070	60.278
23	-146,194.689	-17,650.070	60.295
26	-146,221.693	-17,650.070	60.211
44	-146,174.587	-17,614.928	60.388
46	-146,194.689	-17,614.928	60.327
49	-146,224.221	-17,614.928	60.313
55	-146,173.044	-17,615.682	61.434
57	-146,145.085	-17,615.682	61.468
58	-146,146.396	-17,610.652	60.464
62	-146,200.407	-17,610.652	60.297
71	-146,222.745	-17,582.994	60.398
73	-146,200.407	-17,582.994	60.599
74	-146,187.907	-17,582.994	60.619
97	-146,233.502	-17,544.643	60.605
102	-146,189.981	-17,554.643	60.698
104	-146,170.990	-17,554.643	60.653

※1～49は73年3月16日、
51～104は74年5月7日撮影

Tab. 1 6 A F I-H区標定点一覧表

遺構の実測は写真測量によって行った。航空写真は第83次調査地域を昭和48年9月27日、第86次調査地域を昭和49年5月9日にアジア航測株式会社が撮影した。撮影はヘリコプターにカメラを搭載して行ったもので、60%のオーバーラップと30%のサイドラップを加味している。撮影の仕様はつぎのとおりである。

カメラ：ウィルドRC—5—A

絞 り：8～16

レンズ：115mm (18/12)

高 度：1/200 図作成用 70m

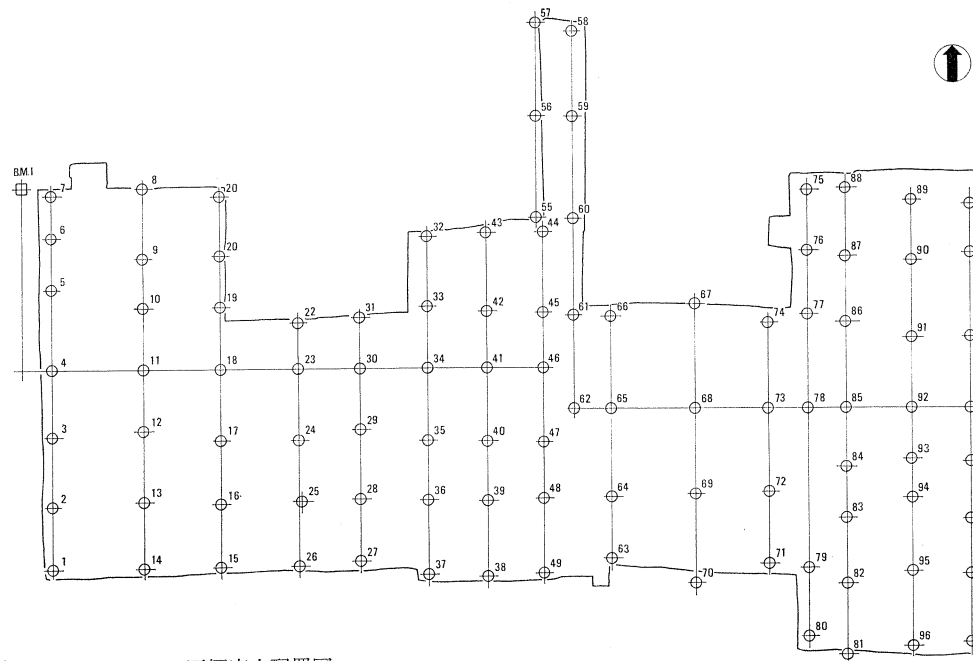
フィルム：コダック エアロタイプ

1/20 図作成用 20m

露 出：1/150～1/250秒

変位修正機：ウィルドE4型

あらかじめ標定点を遺構面に設置して位置と標高を計測したのち、撮影を行う。この標定点にもとずき、遺構図面と遺構写真とを作成した。今回の報告書に用いた図面は、まず縮尺1/50で2.5cm間隔の等高線と随所に絶対高



を記入した原本をつくり、これを見やすいように再度整理したものである。写真は変位修正機を用いてカメラの傾きを修正した歪みのない垂直写真であり、図面と写真とを対比することが可能となるように配慮した。写真測量の後、補足調査の過程で検出した若干の遺構については、図面にあらわれるが写真には出ていない。また、重複す柱穴の前後関係なども最終調査で逆転するものがあり、そのことについても図面で修正した。

fig. 4 6 A F I-H区標定点配置図